
夏の暑さと夜の星

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の暑さと夜の星

【Nコード】

N0044N

【作者名】

brades

【あらすじ】

全く、何でも暑いんだ？
SOS団の活動は現在休止中だが、こんなんじゃ外に出ることもできん。

ん？古泉か？何だ、相変わらず顔が近いぞ、むさ苦しい。
え？ハルヒが？やれやれ、またあいつか。

（前書き）

今回は夏をテーマにして、タイムリーな話を書いてみました。

カラカラに乾いた空気と共に晴れて、夜でも星が大分見えるようになりましたね。

そんな作品に仕上がっているはずですよ。（え

それにしても暑いですね）；・・・（

まるで欲しいものを手に入れた子供のように嬉しそうにカンカン照らしつける太陽が、俺の一切のやる気を奪っていく。

そう、今は8月。

夏休み真っ最中だ。

最近の日本は異常気象だ異常気象だと騒がれているが、そんなことどうでもいいと思いつつ、梅雨という梅雨が無かったり6月の段階で30度をゆうに超えたりした今年を恨めしく思いながら、俺は家でのんびりくつろいでいた。

少しは外に出ないと体力が急激に落ちると懸念されていても、どうしても身体は動こうとせず、エアコンガンガンで扇風機を強で付け、半ばできるだけ外に出ない方が良かった詐欺的な天気予報士に責任を転嫁し、果てしなくインドアに向かっている真っ最中だ。

こう暑いと、家で何をするわけでもなく、ただいたづらに時間だけが過ぎていくことがしばしばだ。

ん？ハルヒか？SOS団は現在活動休止中。どうせ中旬になればまた強制召集がかけられるんだろうが、8月上旬には特に活動は無く、それぞれの時間を過ごしているのさ。

そういえば去年は8月が1万云回繰り返すハメになっていたっけな。今となっては良い思い出さ。

そしてあの春の出来事があったからというもの、古泉曰く「閉鎖空間が発生しなくなった」そうだ。

まだ僅かながらハルヒの超ご都合主義的パワーは残っているが、春から未だに閉鎖空間は発生していないらしい。

やれやれ、あの時はさすがに頑張ったからな。長門もあの一件の後、しばらく学校に姿を見せなかったが、学期末にはいつもの本を読む姿を見せていた。

まあ、こんなことはまたの機会に話せば良い。

それより、誰かこの暑さを何とかしてくれ。我が親愛なるお母上は、「28度以上にすればエコになるのよ」となントも理不尽かつ身勝手な意見を押し通し、それ以下の温度に下げることができない。全く、エアコンが効いてる気がしないぜ。

そしていたづらに時を過ごすこと4時間ほど。

もう辺りは暗くなってきて、だんだん暑さも身を潜め、闇に埋もれてくる。

さて、今日もう終わりかと晩御飯まで何をしようか考えていたところ、

「キヨン君にお客さん〜。」

妹が入ってきた。

おいおい、いつも言ってるじゃないか。入るときはノックくらいしろ。それとアイスを食べ歩きしながら喋るんじゃないやありません。

そんなこんなで玄関まで行くと、・・・何で俺はこんなにもコイツに好かれてるのかね。

こんな真夏に野郎の顔なんざ見たって暑苦しさが2倍になるだけだぞ、古泉。

「それはそれは、申し訳ありませんでした。僕としても今日はゆつくり過ごすはずだったんですが、少し用ができてましてね、貴方を訪ねたということです。」

「まさか・・・閉鎖空間か？」

「いえ、閉鎖空間はあの日以来出現していません。ただ、この所涼宮さんが暑さのせいか、元気が無いようで、我々としても少々困っているというわけなんですよ。」

なるほど、そういえばお前等はハルヒのセラピストみたいな存在だったな。

・・・というか、お前等はどれだけハルヒの監視してるんだよ。プライバシーのプの字も無いのかよ。

「つまり、また俺に振ろうってわけか。」

「実は、涼宮さんは現在この近くの公園のベンチに座っていらっしやるのですよ。」

何？何でアイツがここまで来てるんだよ？

「さて、何故でしょうね？本能がそうさせた、というのは少しロマンチックすぎるでしょうか？」

待て待て、何だそのしてやった顔は。そんな説明で理解するほど、俺は頭良くないぞ。

「ま、すぐ近くにいるなら都合さ。わざわざアイツに会いに行く

のは面倒だからな。」

何よりハルヒの家を知らんしな。

公園に來ると、古泉の言ったとおり、ハルヒはベンチに腰掛けてぼーっとしていた、こういうのを確か・・・物思いにふけるっただけか？

「よう。」

「・・・！あんた、こんなとこで何してんのよ。」

どちらかと言えばこんな所に居ておかしいのはお前だが。まあ、当たり前だが、そんなことを言えばただちに非難されるわけだ。

「特に何もやってない。近所だから散歩してただけさ。」

「・・・そう。」

おいハルヒさん？この前も言った気がするんだが、そんな長門みたいな反応されても困るだけなんですが。

「お前は何やってんだ？」

「あたしもちよっと歩きたくなっただけよ。」

そんなんで電車に乗ってまでここに来たのかよ。

別に理由はあるんだろう。ま、そこまで聞くことはしないさ。

「いくら外が暑いからって、いつまでもこんなところで油売ってたら風邪引くぞ。それに夜道は危ないんだしな。」

「・・・星を眺めてたのよ。」

ハルヒは半ば焦点の定まっていないような目をした。

いつもならばお前はそんなロマンチストだったか？などの切り替えしをするんだが、そんな展開ではないと思い、俺は言葉を選ぶ。

「何だ、何か考え事でもあったのか？」

「・・・思い出してたのよ。・・・4年前のことを。」

4年前・・・七夕のことか？

「あたしは夏の大三角、ベガ、アルタイル、デネブ。その星を見つけてあることを願っていた。忘れられないあの日に・・・。」

間違いないな。おそらく、俺がジョン・スミスを名乗った時のことだろう。一時バレそうになったことはあったが、あの時はハルヒの勝手な想像で隠せたはずだ。

「あることってなんだ？誰か会いたい男でもいたのか？」

我ながらギリギリの質問をしちまった。一步間違えれば大惨事だ。こんな時に言葉が出てこない自分を恨む。

「・・・あの日と今日、別々の人のことを考えていたわ。でも今日は・・・」

そこから沈黙するハルヒ。言いたいことが分かる気がする。だが、それを聞いて俺はどう思うのだろうか？

俺もハルヒも沈黙する中、一体どれだけの時間が経ったであろうか。

「今日は・・・その願いが叶った日だった。」

「・・・え？」

「・・・もう大丈夫よ。あたしはここにいます。」

ハルヒはそう言って俺に微笑みかけた。

・・・それこそ忘れられない、いつものハルヒには見られない優しい笑みだった。

帰り、さすがに仮にも女性一人で歩かせるわけにはいかないと、送れるところまでは送ってやった。自転車に乗っけてる最中、

「・・・鈍感」

と、小さな声で聞こえた気がしたが、気のせいだったのだろうか？

「いいで良いわよ。」

「おう、真っ直ぐ帰れよ。気をつけてな。」

「うん。・・・ありがと、キヨン。」

「あ・・・」

有無も言わず、ハルヒは走り去っていった。全く、ああいうところはどこまでもハルヒらしいな。

夜に照らされた薄い光。頭上に見える幾多もの星に俺は語りかける。

「俺は・・・ここにいます。」

君達はこの夏の夜、満点の星空を見たら何を願うだろうか？
俺の願いはあの春から変わっていない。

俺は・・・ハルヒと共に歩みたい。

（後書き）

というわけで、いかがでしたでしょうか？

ハルヒとキヨン、お互い何の言葉も無くても、心は繋がっているんじゃないかな。

気づかぬ間にお互いを求め合っていたみたいです。

熱いですな（；^ ^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0044n/>

夏の暑さと夜の星

2010年10月11日13時43分発行